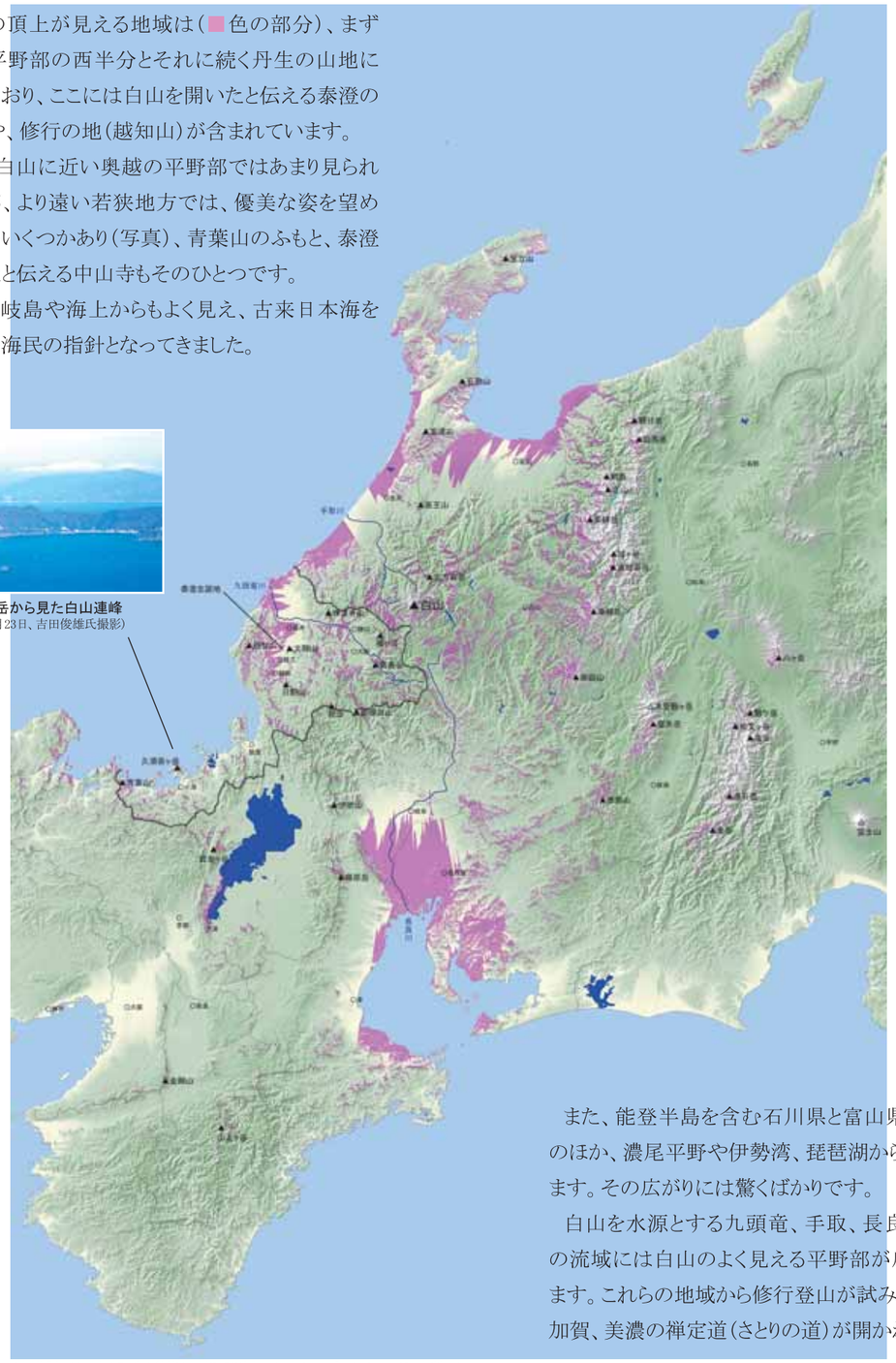
白山を望む

白山の頂上が見える地域は(■色の部分)、まず福井の平野部の西半分とそれに続く丹生の山地に広がっており、ここには白山を開いたと伝える泰澄の生誕地や、修行の地(越知山)が含まれています。

また、白山に近い奥越の平野部ではあまり見られませんが、より遠い若狭地方では、優美な姿を望める地点がいくつかあり(写真)、青葉山のふもと、泰澄が開いたと伝える中山寺もそのひとつです。

遠く隠岐島や海上からもよく見え、古来日本海を航海する海民の指針となってきました。

■ 久須夜ヶ岳から見た白山連峰
(2002年11月23日、吉田俊雄氏撮影)



また、能登半島を含む石川県と富山県の平野部のほか、濃尾平野や伊勢湾、琵琶湖からもよく見えます。その広がりには驚くばかりです。

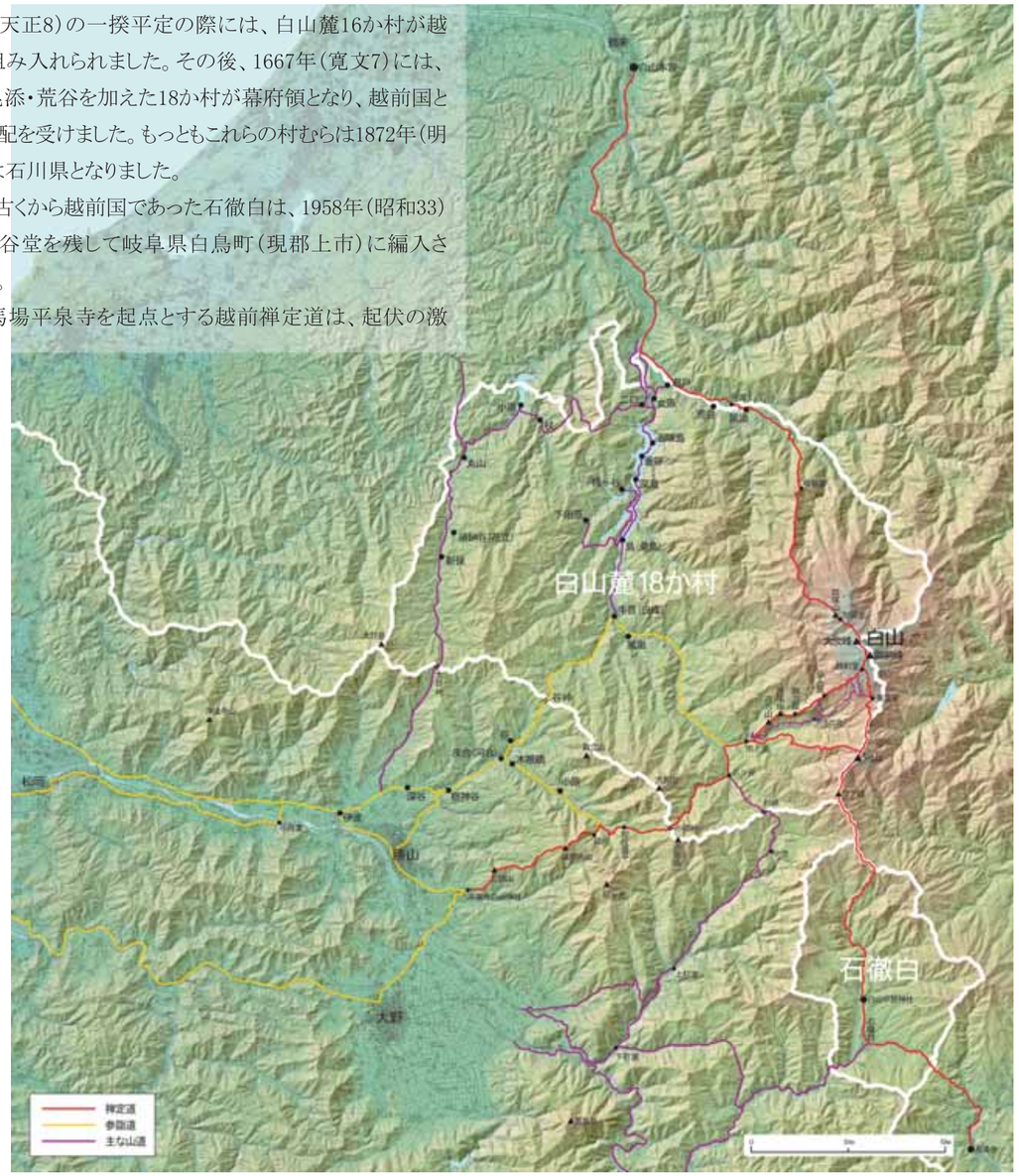
白山を水源とする九頭竜、手取、長良の各河川の流域には白山のよく見える平野部が広がっています。これらの地域から修行登山が試みられ、越前、加賀、美濃の禅定道(さとりの道)が開かれたのです。

地図作製には国土地理院の数値地図(CD-ROM版)、地図ソフト「カシミール3D」を利用した。

白山参詣のなりたち

歴史的にみると、泰澄を共通の開創者として、越前、加賀、美濃から、それぞれ頂上への禅定道が開かれ、白山麓の人々は時には対立しながらも、白山信仰の世界を形成していきました。

戦国末期、この地域の一向宗徒は国境を越えて結びつき、平泉寺を焼き払うなど大きな力をもっていました。このため、1580年(天正8)の一揆平定の際には、白山麓16か村が越前国に組み入れられました。その後、1667年(寛文7)には、新たに尾添・荒谷を加えた18か村が幕府領となり、越前国としての支配を受けました。もっともこれらの村むらは1872年(明治5)には石川県となりました。

また、古くから越前国であった石徹白は、1958年(昭和33)三面・小谷堂を残して岐阜県白鳥町(現郡上市)に編入されました。

越前馬場平泉寺を起点とする越前禅定道は、起伏の激しい道でした。このため、平泉寺が往時の勢いを失った近世には、白山参詣、あるいは湯治の客は、難儀な本道を避けて、谷峠越えの道をとるようになりました。こうして牛首から手取川の渓谷を遡って本道と合流、市ノ瀬の温泉にいたる道が一般的となりました。この他に、皮合(河合)から小原経由で本道に合流、小原峠を越える道をとる場合もありました。